



TITLE:

宇宙を観る, 人生を観る : 巻頭隨筆

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 宇宙を観る, 人生を観る : 巻頭隨筆. 天界 1939, 19(221): 321-323

ISSUE DATE:

1939-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167871>

RIGHT:

天界

第221號 (第 19 卷)

(昭和14年) 9 月 號

巻頭

宇宙を觀る、人生を觀る

隨筆

山 本 一 清

七月の末の或る日、世の中では、火星が近づいたために、新聞もラヂオも、雑誌も、人々の座談にも、火星を語らないものはない景況であつた頃、自分は或る人から

“火星を觀て、何の役に立つのですか?!”

といふ質問を受けた。此の質問を受けて、自分は、思はず、“之れある哉!!”と叫んだ。其の日、ちょうど中村君が宅へ遊びに来てゐたが、この中村君も亦、“實に、良い質問ですね”と言つた。

毎日々々、人々は“火星の極冠が見え始めた”、“雲が火星面に浮んでゐる”、“運河が多く見えない”などと、火星世界の微細な點にまで注意をして、話題としてゐるが、しかしながら、誰もが“一體、火星を見て、何の役に立つ?”といふことに疑問を有たない。日刊の新聞なども、もはや種切りになつて、若い中學生の怪しげな觀測報告からもセンセーションを起さうとしてゐるに拘らず、もつと根本的な此の重大疑問を解かうとすることに、氣がつかない。其のために、或る老人からは“國家の非常時局に際して、火星なんどのことに心を奪はれるとは何事か!”と言つたやうな御叱りを蒙る者さへ出来るのである。

昔しから“鹿を追ふ者は山を見ず”といふ。實際、技術の些細なことにのみ囚はれて、大局を見落すことは、世に例が多い。支那の蔣介石が抗戰の策謀にのみ囚はれて、大局の推移に眼を掩ふたがために、遂に孫逸仙の中華民國を臺無しにしてつて、國を亡ぼしつゝあるなど、今日、最も良い實例である。

囚はれる者は皆其の道の“玄人”か、或は敢へて“玄人”を氣取る人々である。自由の立場から大局を見、事の輕重を真によく判斷する者は偉大なる“素

人”である。尤も、只、一概に、玄人が囚はれて、素人が自由人だといふのではない。玄人にも眼覺めた人はあろう。しかし其れは玄人學を超脱した眞の玄人であつて、世間にさう澤山あるものでない。又、素人は世の中に無數に存在する。其のうちの大部分は單なる厄介者であるが、しかし、少數の偉大なる素人がある。この偉大なる素人こそ、文化の發展のために大切な人である。ガリレオの如き、E. E. パーナードの如き、パーシバル・ローエルの如き、E. C. ピケリングの如き、此等は近世の天文學界に於ける“偉大なる素人”であつた。學術の歴史を緋けば、こうした人々が文化發達のために、如何に大きい貢獻をしたかを知ることが出来る。

わが國の天文界を顧るに、諸外國と同様に、多少の玄人と、無數の素人とが居る。玄人天文家は、それぞれ研究や觀測の技術の末に没頭して居れば、それで良い。これ等の人々は、所詮、學界の大勢を動かす人々ではなくて、只、その技術や技巧によつて、そこはかとなき成功をかち獲れば其の使命は終るのである。之れに反して、多くの素人天文家は、其の自由と獨創力とを生かして、文化の大勢の支配者となり得る可能性を有つてゐる。しかし、之れは“可能性”があるといふだけであつて、大多數の素人たちは、實は其の自らの天分を知らずに過ぎ去つて行く。最も憐れむべきは、素人が玄人になりたいと心掛けて、其れのみに専心することである。特に我が國には、こうして、一日も早く玄人になりたいと希ふ素人が多い。上にも記した通り、“吾人が何故に火星の觀測を重要視すべきか”といふ疑問に一顧も呉れないで、只、ひたすらに“運河の數を數へたり、雲霧の去來に驚心する”如き人が多い。之れでは偉大なる學界の指導者は生れて來ない。

玄人も素人も共に文化の進歩のためには大切な存在である。しかし、人世全體から言へば、素人は社會の主人であり、玄人は其の技術を以つて社會に奉仕するサーヴァントである。そして、素人の中から（少數ではあらうが）文化の眞の指導者が現はれるのである。

今から百年前、ドイツの片田舎でシヅーベが太陽の黒點を數へ始めた時に、ベツセル其の他多くの玄人天文家は之れを嘲笑した。ところが、二十年ならないうちに、黒點の週期活動は發見され、シヅーベには金牌が贈られ、チウリヒ

の天文臺は太陽研究の新しい陣容を立てることになつた。ビケリングがハーバード大學天文臺長に任ぜられて、子午環を取り除き、分光プリズムを赤道儀に取り付けた時に、米國の多くの玄人天文學者は“ハーバード天文臺の傳統は滅び、權威は地に墮ちた”と嘆いた。しかるに、まもなく此のハーバード天文臺は分光器と光度計と寫眞術と（之れ等は何れも物理學者の有つものである）を以つて立ち上り、今は天體物理學の一大中心となつて了つた。

希望に満ちた前途を恵まれてゐる世の素人天文家たちよ！ 或る程度までは勿論、玄人（専門家）の優れた技術を學ぶべし、しかし、決して其れに囚はれ、其れに終始してはならない。諸君の使命は些細なる技術を超えて、更に大なるものがあることを忘れてはならぬ。素人諸士よ、希くは偉大なる素人となれ！ 火星を弄ぶのも宜しい。しかし、火星そのものは、地球人のおもちやとなるべく餘りに嚴肅なる存在である。特に、又、今は、我が日本のみならず、全世界が死活の問題に直面してゐる“非常時”である。單に火星や彗星を暇つぶしに弄ぶべき場合ではない。それにも拘らず、吾人が世人の眼を天體へと導く所以は、何ものにも代へ難き重要性を此等の研究に期待するからである。

(1939. 8. 1)

東亞の公私各方面の天文家に告ぐ〔急報 367〕

多分御承知の通り、昨年來國際天文同盟の一部に新しく天文文獻編輯委員會が組織せられ、其の事業の第一着手として、1881年から1898年まで前後18年間に發表された全世界の天文學的研究論文を集め、之等のカタログ及び其の内容の概略を編輯することゝなつた。

下名は其の委員の一名であるが、他の委員は殆んど全部歐洲に居る人々なので、自然、下名は東亞全體にわたる文獻を蒐集しなければならないと思ふ。

就ては上記1881—1898年間に公私各方面天文家から發表せられた論文或は其の寫しを2部づつ本年九月末日までに下名へ届けて頂きたい。

若し之れに洩れる場合には、永く其の文獻は學界に知られざるまゝ葬り去られるかも知れないと思ふ。

尙ほ此の委員會の詳細は天界第222號（來る十月號）を見られよ。

倉敷天文臺長 山本一清
（住所：京都市吉田泉殿町59）